



京街道について

【担当】小椋ミドリ

京街道は京都へ向かう道の総称で、大坂へは大坂街道、丹波・丹後・但馬へは山陰街道・宮津街道と呼ばれた。

大坂京街道は、大坂と京伏見に壮大な城を築いた豊臣秀吉により文禄3年(1594)から慶長元年(1596)にかけて、淀川左岸の築堤工事がなされ、堤防道(文禄堤)として誕生、大坂と伏見の最短路となった。

江戸幕府は大坂を直轄地とし、京街道を参勤交代の公道としたが、大名などの朝廷接触を避けるため、京山科手前の大津宿から追分廻りで伏見宿・淀宿・枚方宿・守口宿の4宿場を東海道に加え五十七次とし、終点を三条大橋から大阪城の北口の京橋(寝屋川にかかる小橋が京都に通じる橋の意)としたが、その後幕府は天下の台所として経済的地位の高まった大坂を重視し、終点を高麗橋に変更した。

明治政府は道路行政として、高麗橋(現大阪市中央区)に元標(道路起点)を建て、京橋・片町・野田橋・今市・守口・佐太・磯島・渚・三栗・上嶋・樟葉と大阪府下の長さを29kmと定め、京都府八幡市橋本へ入る道路とした。その後桂川左岸の鳥羽街道経路を大坂街道とし、京都大阪間の旧国道1号となる(現在はほとんどが府道)。伏見経路は、現在京阪電車本線が走っている。

京街道の思い出(上田信子)



■大正末期頃の京街道
(今市交差点付近から京都方面を見る。写真左側に淀川が流れている)

この写真は、私がまだ小さい頃、小学校もまだの頃の風景で、京街道の上に立って京の方を見ているところです。手前のうどん屋は私の祖父がやっていました。

朝早く上の方から荷車を牛や馬にひかせて大阪の方へ行くのです。お米の俵や野菜などを沢山積んでかたまって行くのですが、丁度うどん屋が一服するのにいいところだったので、沢山止まって休憩していました。

中程に見える屋根は私どもの家でした。そばに大きな樺の木がよく見えています。

幕末の頃はこの京街道を沢山の人が急いで通ったりしていたと言っていました。

碑や道標

京街道の面影を残す景観は失われつつあるが、今市で国道と分岐し細い道に入ると京街道の説明プレートがあり、途中千林商店街と交差し、森小路京かい道商店街より京橋に出ると、日経新聞社前の石垣などに当時は俵ばれる。



■整備された京街道の碑や道標



■現在の京街道(今市交差点付近から京都方面を見る)
※前ページの大正末期頃の写真とほぼ同位置



～「京街道」に関するコラム

- 江戸時代の京街道は2間ほどの幅しかありませんでした。京都から大坂への下りは三十石舟を使うのが一般的であったため、人の流れは大坂から京都への上りがほとんどでした。
- 集落内の京街道には石油ランプが設置され、夕方になると、交代でホヤの掃除と石油の補充をしまわっていました。
- 国道1号は昭和8年に開通、開通時からアスファルト舗装で、幅が十三間もあったため、十三間道路と呼んでいました。それに対して、京街道の方を旧国道と呼ぶようになりました。当時はまだ国道2号で、昭和27年の新道路法に基づく路線指定により、国道1号に変更されました。
- 街道の名前は、向かう方向の地名で呼ばれていました。同じ街道でも大坂から京都へ向かう場合は京街道、京都から大坂へ向かう場合は大坂街道と2つの名前がありました。



■京街道概要図
(上広域図/左古市周辺図)

文禄堤について



■現在の京街道(守口市)
守口市にある旧京街道は、街道整備が行われているほか、うだつのある家屋などが見られ街道としての風景を継承している。

- 秀吉は伏見港を京都の玄関口として淀川の水運を整備する一方、文禄5年(1596)諸大名に命じて大坂～伏見間の淀川の堤防修築を行いました。
- この文禄堤と言われる事業は、淀川下流域の低地における広範囲な治水や利水に加え、大坂城外郭などの軍事戦略としても機能したと言われています。
- 文禄堤は長さが約27kmありますが、度重なる淀川の改修工事などでほとんど姿を消しました。
- 今では守口のみ、守口宿として、宿場で栄えていた当時の面影を感じることができます。
(建設局発行パンフレット参照)